



一般社団法人

日本病院薬剤師会

Japanese Society of Hospital Pharmacists



病院薬剤師への招待

病院薬剤師として臨床を学び、医療に貢献する！

日本では全国で約8,500の病院が1日当たりそれぞれ約130万人の入院患者と外来患者の診療を行っています。病院・診療所に勤務する薬剤師は約58,000人。院内では多くの医療職種と、院外では薬局薬剤師などと連携して、患者に最適な薬物療法を提供しています。

近年、チーム医療の充実と共に、病院薬剤師の活躍は高く評価されています。病院薬剤師の業務は質・量共に拡大を続けており、医薬品を安全かつ適正に使用し、医療の質を一層向上させるため、これから薬剤師になる薬学生の皆さんと共に臨床を学び、医療に貢献したいと思います。

病院薬剤師の仕事は、各病院の病床数、診療科、院外処方率、業務分担等に応じて、薬に関して総合的に対応する薬剤師、専門分野に特化する薬剤師、他職種と協働してチームで業務を行う薬剤師など多岐に渡っており、高度な薬学的知識や技術を基に医療現場で多くの業務を行っています。

各都道府県病院薬剤師会や日本病院薬剤師会では、必要な知識や技術の習得のために、数多くの研修会を開催し、専門・認定薬剤師制度を運営するなど、現場で働く薬剤師のために、様々なサポートを行っています。

病院薬剤師は、最前線の医療現場で業務を行うため、その分大きなやりがいがあります

病院薬剤師として大学での学習・実習経験を活かしてみませんか！

URL <http://www.jshp.or.jp/>

是非、薬学生向けコンテンツをご覧ください。

- ・日本病院薬剤師会会員施設紹介
- ・病院薬剤師求人求職情報
- ・病院薬剤師やりがい、業務紹介スライド等を掲載

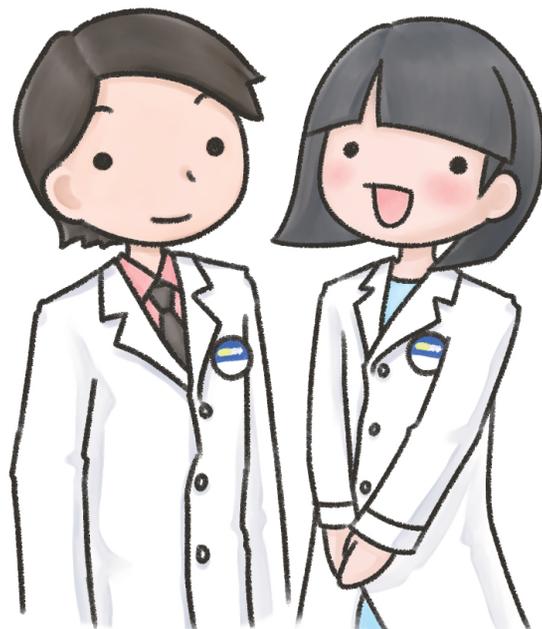


一般社団法人 日本病院薬剤師会

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 2-12-15

日本薬学会長井記念館 8階

TEL: 03-3406-0485 FAX: 03-3797-5303



病院薬剤師の約8割が入会しています

病院薬剤師の主な業務

病棟薬剤業務

病棟に配置された薬剤師は、最適な薬物療法の実施による有効性・安全性の向上などを目的に、投薬前に入院患者さんの持参薬等の服薬状況の確認や、入院中、特に注意が必要なハイリスク薬剤などを確認し、必要に応じて医師に処方提案を行うことや、他の医療スタッフからの薬剤に関する相談などにも対応するなど、他職種と連携しながら業務を行っています。



薬剤管理指導

入院患者さんへの医薬品適正使用の推進を目的として、投薬後に患者さんごとに服薬指導を行い、副作用の予防や早期発見、患者さんの薬歴管理、服薬状況の把握や薬剤の効果を確認し、薬剤管理指導記録を作成し、医師や看護師等と情報共有を行います。患者さんやご家族にお薬の説明をすることによって、お薬を安全に使用していただくことができます。



注射薬の混合調製

食事が取れない患者さんの栄養補給のための高カロリー輸液や抗がん薬の治療が必要な患者さんのために、薬剤師が無菌的に注射薬を混合調製します。無菌室、クリーンベンチ、安全キャビネットなどで細心の注意を払って注射剤の混合調製を行っています。医療安全の確保には豊富な知識や新しい技術が必要となるため、研修等を通じて研鑽に励んでいます。



医薬品情報管理 (DI)

医薬品を適正に使用するために医薬品に関する情報を収集・評価し、その情報を医師などの医療従事者や患者さんに提供し、最適な薬物療法の支援を行います。厚生労働省の副作用情報、医薬品の承認情報、企業から提供される各種情報に加え、学術論文や学会発表など医薬品を使用する上で必要となる情報を迅速に収集し、院内の関係者に情報提供を行います。



チーム医療

医療専門職種の専門性を発揮し、積極的な協働・連携を図ること等により、医療の質を高め、患者さんの状況に的確に対応した効率的な医療サービスを提供するためにチーム医療の推進が図られています。病院薬剤師は、薬物療法の高度化を背景に、医療の質の向上、医療安全の確保の観点から、数多くのチームに参加することが求められており ①栄養サポートチーム ②外来がん化学療法チーム ③緩和ケアチーム ④感染制御チーム ⑤褥瘡対策チーム ⑥糖尿病チーム ⑦精神科チーム ⑧周術期チームなど施設の実情に応じて活躍しています。



病院薬剤師のやりがい

- **自分が提案した薬物療法が取り入れられ、医療スタッフから評価された。**
- 患者さんはもちろん、医師や看護師などの医療スタッフも近くにいるので連携しやすく、**自分が医療チームの一員だと実感**できる。
- 病棟カンファレンス、様々な勉強会や研究会など、**とにかく勉強できる機会があり**、知識レベルを高めることができる。
- **カルテを見て患者さんの状態をリアルタイムで確認でき**、医療スタッフと情報共有をしながら**薬物治療に濃厚に携わること**ができる。
- **臨床現場におけるクリニカルクエスションを研究対象**として学術発表を行い、論文化して他の研究者に情報発信ができる。

